

ギャンブルで

米国戦闘機を獲得した日本人医師

これは実話である。

「日米終戦50周年」というから、

1994年(平成6年)前後の時期。

在日米海軍は、ちょうど半世紀前、コーンパイプをくわえて、占領地日本の厚木飛行場に悠然と降り立った占領軍総司令官マッカーサー元帥のそつくりさんを仕立てて、あの歴史的場面の再現を見せ場とする一大ページェント(野外劇)を計画していた。

終戦とは、米軍にとっては勝ちいく。さだが、日本にとっては敗戦にほかならない。

米軍サイドは、面白半分に、元帥のそつくりさんを思いつくような余裕だが、日本人としては、建国以来初めて外国に占領された屈辱の歴史のリコールなんぞはマッピラというところ。

だから、在日米海軍が、日本側の「マ元帥そつくりページェント」の受け入れ先を探しても希望者がなかなか名乗り出なかつたのも無理はない。そこで、厚木基地施設部長は、厚木基地の出入りの業者に、しかるべき日本側受け入れ先探しを依頼した。そのとき、受け入れ窓口として白羽の矢を立てられたのが、徳島県松茂町で、医療機器販売会社「アーレジヤー」がミックスするドイツ・カジノ型の温泉治療所(クアハウス)の建設を見ていた中西昭憲医師だつた。

中西医師は、知人の大木建設野沢社長の紹介で、サンケイグループに計画を打診、さらにJTBの石井会長の協力を得て、「日米終戦50周年記念ページェント」の計画案ができあがつた。この計画書写真を練る間に、グローバルなコスモポリタンの中西医師は、在日米軍厚木基地司令官ミルズ海軍大佐ともミニケーションのパーソナルな

パイプが繋がつたという。中西医師は、歴史は歴史として、15億円の経費を負担しても、恩讐の彼方のページェントを敢行しようという勇気と洒落つ氣のあるスポンサー探しに奔走し、ついに理解のあるマスコミの協力を得る水際まで漕ぎ着けたのだった。

ところが、そのページェントには、米軍に捕獲された旧日本軍の戦闘機「ゼロ戦」や「雷電」に交じって米軍の航空機も多数飛来するという企画も加えられていた。もともと、マ元帥そつくりさんなどというお坊っケ調の日本敗戦記念日の一大野外ページェントを快く思つていなかつた日本側一部労組や国粹主義者たちは「日本の上空をいまさら戦勝国氣分で米軍機が我が物顔に飛ぶのは許せない」として猛反対。また、旧式の飛行機が飛行する安全性という観點からも、「マ元帥そつくりページェント」は日本側の協力を得られずボシャつてしまつたのだった。

計画は陽の目をみなかつたが、中西医師は、ページェント問題で、ミルズ大佐と何回か面談して交流を深めるうちに、冗談も言い合える仲になつていた。そんなある日、ミルズ司令官との会話の中で、中西医師が「厚木飛行場の地下には、敗戦当時、旧日本軍が密かに残した極地防衛機・雷電が今でも保管されているという噂があります。探索をお願いします」と頼みこんだ。すると、大佐は「いや、噂はあるが、それはスリーピング・ライオンだ。地下基地も調査しているが、もう米軍の力で完全に撤去されてない」ときつぱり否定。そこで、二人の間で「賭け」が成立した。それは、「終戦後半世紀経過した厚木飛行場に、旧日本軍の航





とはいへ、その現実化には、実際的な難問が待ち構えていた。一つは、いくら空軍司令官とはいへ、また、御用済みの戦闘機スカイホークとはいへ、まぎれもなく米国政府の所有物である。それを、日本の一民間人に無償で譲渡するにはそれ相応の事由が必要となる。ということ。そこで、ミルズ大佐は、日本の四国アイランドに航空博物館ができ、その館長の中西医師に米軍で不要になつた戦闘機を「スクランプ」にするのはもつたいないから、「冗談の賭け」の約束を順守し、一機貸与すると、手続きをとつてくれたのだという。もう一つの難問は、神奈川県の厚木基

同診療所は、広い敷地を利用して、タラソテラピーも試みる新式のスパ一温泉機能を備えたドイツ型温泉治療場（ケアハウス）の建設を本年春から起工予定という。敷地内の”徳島航空博物館”に展示される濃紺の精悍そつな米海軍戦闘機の勇姿は、最先端の医療に生命を賭けるギーミング男・中西昭憲医師の勇敢な賭けとジョークのベットの契約を守った米軍司令官の滋味豊かな人間性の象徴として、訪れる人々に微笑と勇気を与えることだろう。

それから、しばらくして、厚木飛行場の地下探査が行われ、なんと、その作業の最中に、旧日本軍飛行機の残骸と認められるプロペラシャフトの破片が掘り出されたのだった。

「ユ一の勝ちだ。賭けの約束通り、米海軍戦闘機一機あげるよ」

在日本米軍厚木基地司令官ミルズ大佐の言葉に中西医師は仰天した。と同時に、口約束の「賭け」にでも、契約を実行する異国人のビヘビアとその豊かな人間性を許容する米国の懐の深さにいたく感動したという。

空機の残骸が埋まっているかどうかの是非を問つというギャンブルだった。しかも、米軍のパーソナルエクスカーションな飛行場整備作戦を確信するミルズ司令官は、中西医師が、「万一一旦日本軍機などが出土したら、あの飛行機をください」と、ちょうど滑走路の端に、スクランブルするため駐機していたスカイホークを指さした。即座に、司令官の「〇Ｋ！」という返事が返ってきて賭けの報酬も約束されたのだった。

ブルー・エンジエルの引

因に、別掲英文の「借款契約書」の日付は1996年7月2日、米国政府資産（NAVICP・海軍在庫管理府イラデルフィア事務所）の航空機A-4E号（ナンバー151095）を徳島航空博物館に、とりあえず5年間、以降善意の管理者として更新する条件で貸与するとのある。

STANDARD LOAN AGREEMENT